「明るいフジコの旅」

フジコは老人ホームで暮らしている。このところフジコの頭を占めているのは四十年前に家族と住んでいたアパートのことばかりだ。アパートは海の近くにあって、海まで砂原が続いていた。一度だけ夫や子どもたちと海へ出かけたような記憶がある。家族で砂原を歩いている写真があったが、失くしてしまった。今となっては、その海に行きついたのかどうかもはっきりしない。アパートがまだあるのかどうかもわからない。

娘のカズコはフジコのことを心配して、あれこれと世話を焼く。だが、フジコはもう欲しいものはない。原爆のことを思い出して記録するようにと、カズコがくれたノートを前にしても、書くことは浮かばない。

ある朝、フジコは小さな荷物だけ持って、老人ホームを抜け出す。電車やバスを乗り継ぎ、かつて住んでいたアパートへと向かう。あたりは静かで以前のままだ。坂道を上がっていくと、アパートはそのまま建っている。フジコは階段を上り、部屋のベルを鳴らす。部屋には若い男女が住んでいる。彼らはフジコを部屋にあげてくれる。彼らもその古びたアパートや海まで続く砂原が気にいっている。

フジコは彼らと海に向かう。他にも海に向かう人々がいる。足元がおぼつかないフジコを男はおぶってくれる。フジコは若い男の背中から海を見る。握り飯を食べると、彼らは泳ぎに行ってしまう。フジコは海の中に入って行く。水に包まれると、川で泳ぐのが好きだった子どもの頃の記憶がよみがえる。原爆に遭い、焼け出された自分や兄のことを思い出す。フジコは空を見上げると、足を蹴りだし、しなやかに泳ぎ出す。